

2025.8
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみや 薬

8号

第47巻
No.433



フジバカマ *Eupatorium fortunei* Turcz. (キク科 Compositae)

生薬 ランソウ（蘭草） 蕾の頃地上部を刈取り、2～3日天日乾燥し、さらに陰干しする。

成分 精油：*p*-cymene, methyl thymyl ether, neryl acetate、フェノール誘導体：thymohydroquinone, coumarin, *o*-coumaric acid、トリテルペン類：taraxasterol 等。

効能 利尿、解熱、通経薬として糖尿病、浮腫、生理不順に用いる。補温、肩こり、皮膚の痒みや神経痛に浴湯料として用いる。

生薬 ランソウ（蘭草）

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



本州の関東地方以西、四国、九州、朝鮮半島と中国に分布する草丈1-2mになる大型の多年草。古く中国から渡来した帰化植物と考えられていましたが、日本在来種という説もあります。人家に近い日当たりのよいやや湿った河原の堤防や、草地に自生していますが、現在では地球環境の変化によって数を減らし、絶滅の恐れが危ぶまれている植物であり、環境省のレッドリストでは準絶滅危惧（NT）種に指定されています。観賞用に庭や鉢などにも植えられています。

地下茎を伸ばして株が大きく成長するように繁茂します。大きな株から高さ1-2mほどの茎を多数直立し、葉は対生で葉柄は短く、下部の葉は3深裂、葉縁に鋸歯があり、花期には枯れます。中部の葉は3深裂して葉縁に鋸歯があり、葉の上面は濃緑色で少し艶があって無毛、下面は脈上にだけ毛があります。上部の葉は小型になり、切れ込みません。乾燥した茎や葉には強い芳香があります。8-9月ころ、茎の先端部分を散房状に淡い紫紅色を帯びた白っぽい小さな花を群がり咲かせます。頭状花は5個の管状花からなり、花冠は白に近い色をしています。果実は長さ約3mmで黒色、冠毛は長さ6mmほどです。

最近園芸店において「フジバカマ」として販売されているものは日本国内で古くから野生しているフジバカマとは姿が異なっているように思えてなりません。その相違点を挙げてみますと、在来のフジバカマが草丈1-2mほどにもなる大型の草本であるのに対し、園芸品は草丈0.5-1m程度にしかありません。花色も在来種はわずかに淡紅色を帯びる程度なのに対し、濃い紅色を呈します。葉も在来種に比べると小型で質が薄く、葉柄はごく短く、葉身は3深裂し3小葉のようになり、裂片は幅が細く披針形です。在来種は葉柄がやや長く、茎の上部の葉は切れ込まず、茎の中～下部の葉は3深裂するものがありますが、葉身はつながっており小葉のようにはなりません。香りも在来種よりも強く、より甘い香りがするようです。この種は近年になって原産地の中国から持ち込まれた外来種と思われます。繁殖力も強く、在来種との交配が起こらないか心配です。

秋の七草の一つとして親しまれています。『万葉集』（700-800頃）に

○山上臣憶良の、秋の野の花を詠める二首

秋の野に咲きたる花を指折りかき数ふれば七種の花

萩の花尾花葛花瞿麥の花女郎花また藤袴朝貌の花

『万葉集』に「藤袴」が詠まれている歌はこの一首のみであり、後の『古今和歌集』（915）には多く詠まれていることを考えると、中国伝來說、それも奈良時代（710-794）以前に伝来したという説が有力になってきます。山上臣憶良（660-733）は大寶二年（702）第八次遣唐使として唐に渡っていることから、中国でフジバカマに遭遇していることが考えられ、日本ではまだ馴染みの薄いフジバカマを秋の七草に選定できたのではと推測されます。また七草の内フジバカマ一種のみが外来種であったことも頷けます。

古くから利用され、『大戴礼』（前漢BC202-AD8）「夏小正」五月には「蘭を蓄ふ。沐浴の為にするなり」とあり、香りで清めるために使われ、薬としても、『神農本草経』（2C-3C）に「蘭草、一名水香。味辛、平。池沢に生ず。水道を利し、蠱毒を殺し、不詳を辟く。久しく服すれば、気を益し、身を軽くし、老いず。神明に通ず」と使われています。他に若葉を食用としても用いました。（村上守一 記）